



第36期第7回京都市社会教育委員会議の模様をマナビがレポート！

令和7年3月5日（水）、京都市生涯学習総合センターにおいて、第36期京都市社会教育委員会議の第7回目となる会議が開催されました。「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」策定や「京都市はぐくみプラン（京都市子ども・若者総合計画）」策定等について議論されました。

■ 出席委員（17名のうち14名） ※五十音順

稲垣 恭子 委員、戌亥 慎吾 委員、ウスビ・サコ 委員、大脇 晋太郎 委員、小林 五月 委員、佐竹 美都子 委員、園部 晋吾 委員、豊田 まゆみ 委員、永田 紅 委員、七海 薫子 委員、本郷 真紹 委員、桎木 良子 委員、松田 規久子 委員、森口 真希 委員

開 会

1 議 事ー1「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」策定について

（1）説明 教育委員会生涯学習部学校地域協働推進担当 小田家庭教育事業係長

（2）質疑応答・議決

議 事ー2「京都市はぐくみプラン（京都市子ども・若者総合計画）」策定について

（1）説明 子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部育成推進課 門脇担当係長

（2）市民活動について（大脇委員による実践報告）

（3）協議

2 報 告

（1）京(みやこ)まなびいニュースレターについて

（2）「新京都戦略（骨子）」パブリック・コメント結果について

（3）令和7年度京都市教育委員会予算案について

（4）令和7年度「学校教育の重点」について

3 主催事業 及び 刊行物の案内

閉 会

■ 議 事ー1「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」策定について

○ 稲田 新吾 京都市教育長 諮問

「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」の策定にあたり、「子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方」について、社会教育委員会議に諮問させていただきます。

○ 事務局説明（小田家庭教育事業係長）

子どもの読書活動は、言葉や感性、表現力、創造力を育むために重要です。京都市では「子どもの読書活動の推進に関する法律」を踏まえ、平成16年度に「京都市子ども読書活動推進計画」を策定し、現在、第4次計画を進めています。しかし、全国



的な調査では、学年が上がるにつれて不読率が上昇していることが示されており、新型コロナウイルス感染症の影響やICT環境の整備など、子どもたちを取り巻く環境が急速に変化する中で、読書活動の推進は不可欠です。

令和7年度に第4次計画が終了するため、新たに家庭・地域・学校が主体となって取り組む具体的な内容を示した「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」を策定します。本取組指針を子どもの読書活動の推進に一層意義のあるものとするには、社会情勢の急速な変化や現行の計画の成果や課題等も踏まえ、家庭・地域・学校等が中心となり社会全体で取り組む、今後の「子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方」を検討する必要があります。以上の理由により、諮問いたします。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

説明を受けまして、「子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方」についての議論を社会教育委員会議としてまとめていくということで引き受けたいと考えています。しかし、定例会議での議論だけでは時間の制約もあります。より専門的・集中的に協議するため、「京都市社会教育委員の会議規則」第6条に基づき、読書専門部会を設置したいと考えます。読書専門部会の説明を事務局よりお願いします。

○ 事務局説明（小田家庭教育事業係長）

読書専門部会の設置の趣旨は先ほどの諮問理由に基づいており、設置期間は令和8年3月31日までを予定しています。委員構成は、社会教育委員から3～4名と、外部から1名程度の特別委員を予定しています。また、アドバイザーとして取組の実践者や有識者の方等にも参画いただきます。

スケジュールについては、年度末の答申に向け、年度中に4回程度の会議開催を予定しており、専門部会で集中的に審議し、途中で社会教育委員会議に議論の内容を報告し、意見を聴取します。最終的に専門部会の結果をまとめ、社会教育委員会議に報告し、社会教育委員会議から、教育委員会事務局に「子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方」のまとめを答申します。教育委員会事務局は答申を受けて、取組指針を策定します。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

説明を受けて、読書専門部会の設置について、意見や質問などありますか。

それでは、読書専門部会の設置に、了承いただけますか。（異議なし）

了承いただけたとし、読書専門部会の設置を決定します。今後、事務局と協議の上、数名の委員に、読書専門部会の委員への就任を依頼しますので、ご協力をお願いします。

読書専門部会で検討された内容を踏まえ、この社会教育委員会議においても議論を深め、令和7年度中に教育委員会に答申する方向で進めていきます。

■ 議 事－2（1）「京都市はぐくみプラン（京都市子ども・若者総合計画）」策定について

○ 事務局説明（小野生涯学習推進課長）

京都市では、妊娠前から子ども・若者まで切れ目のない支援を提供するための総合計画として「京都市はぐくみプラン」を策定し、施策の推進に取り組んでいます。現行の計画は令和2～6年度を計画期間としており、今年度末で終了します。これに伴い、新たな計画の策定が進められており、令和7年3月中旬に最終版が公表される予定です。

本日は、この新たな計画の概要を説明した後、子ども支援の活動を行っている大脇委員に実践報告をしていただきます。その後、新たな計画の内容や大脇委員の発表内容を踏まえ、今後の京都市の子ども・若者に関する施策や取組の充実に向けて、社会教育や生涯学習の観点から意見をいただきたいと考えています。

○ 事務局説明（門脇担当係長）

令和5年4月1日に「こども基本法」が施行され、同年12月には「こども大綱」も発表されました。これらを考慮した新計画を、京都市はぐくみ推進審議会や専門部会の会議を経て取りまとめました。

策定にあたっては、市民の意見を募集し、621名から1,898件の意見をいただきました。「こども基本法」の趣旨を踏まえ、子どもや若者からの意見を集めるために、わかりやすい冊子や動画を作成し、教育委員会の協力を得て、学校から保護者に連絡アプリ「すぐーる」で配信しました。その結果、小学生からの意見が最も多く、全体の約3分の1を占めました。また、30歳以下の意見が全体の約3分の2を占め、若者にも興味を持ってもらうことができました。

京都市はぐくみ推進審議会で協議をまとめ、最終版は3月末に京都市のホームページで公表予定です。

新しい「京都市はぐくみプラン
〈2025～2029〉」は[こちら](#)。

まず、現在の「京都市はぐくみプラン」は子ども・若者に関する総合的な計画で、各種計画を一体的に策定しています。新計画も同様に、法定計画や教育基本法に基づく計画などを一体的に策定します。

次に、子ども・若者やその家庭を取り巻く現状について、虐待や障害などの支援ニーズの増大、居場所の現状などをグラフや数値で示しています。また、「目指すべきまちの姿」として、すべての子ども、若者、子育て家庭の最善の利益を中心に、「子育て・教育環境日本一」を実感できるまちを目指します。

第2部の具体的方策では、5つの重要事項を掲げています。

1つ目は「子ども・若者、子育てにやさしい『こどもまんなか社会づくり』」

で、経済的負担の軽減や住宅支援、遊び場の拡充、教育環境の充実などを含みます。2つ目は「子ども・若者の意見反映」で、児童館や青少年活動センターでのヒアリングやワークショップ、市長との対話会議などを実施しました。今後は、いただいた意見の反映プロセスを検討し、子育て支援者等の意識醸成にも取り組みます。3つ目は「居場所と出番」で、学童クラブや放課後まなび教室、児童館、青少年活動センター、子ども食堂などの居場所づくりと出番づくりを支援します。4つ目は「子どもの育ち」で、幼児教育や保育の質の向上、妊娠前から幼児期までの切れ目ない支援、京都ならではの遊びと体験を掲げています。5つ目は「多様な支援ニーズへの対応」で、複雑化する課題への対応、ヤングケアラーやひとり親家庭への対応、行政や支援機関との連携による包括的な支援体制の整備を掲げています。

P19からは、ライフステージに応じた施策や子育て当事者を支える施策を体系的に整理し、掲載しきれない取組はホームページで公開予定です。

P37以降には、各種需給計画があり、ニーズとサービスの量の見込みや提供体制の確保方策を示しています。保育や学童クラブの待機児童ゼロ継続や、ヤングケアラー支援、こども誰でも通園制度などの新たな取組も含まれています。

「京都市はぐくみプラン やさしい版」は、先ほどの5つの重要事項を小学校高学年程度の子どもで



も理解できるように、絵や写真、ふりがなをつけて平易な言葉遣いで説明しており、子どもや保護者にぜひご覧いただきたいと考えています。

また、市民意見募集の際に作成したスライド動画は、小学校や11月に開催された「^{みやこ}京こども居場所フェス」でも使用したのですが、新計画でも同様に動画の作成や「やさしい版」の動画化を検討しています。



○ 動画視聴

■ 議 事一2（2）市民活動について（大脇委員による実践報告）

○ 大脇 晋太郎 委員（市民公募委員）



私が活動する子ども食堂「京都 Tera.Coya」について発表します。

はじめに、子ども食堂「京都 Tera.Coya」代表の小林について紹介します。小林は、裕福な家庭で育ちましたが、10代のほとんどを少年院で過ごしました。大人から見放され、周りから全く手を差し伸べてもらえなかった経験から大人のサポートが大切だと感じ、子ども食堂を立ち上げました。

子ども食堂は、一般的には貧困対策として安く食事を提供する場所というイメージがありますが、実際には利用形態が変わってきています。学習支援の場、家からお弁当を持ち寄って子ども同士のコミュニティが形成される場にもなっています。

子ども食堂では、異なる年齢層の関係性、「斜めの関係」を重要視しています。特に大学生が子どもの相談相手になることが多く、性の悩みや家族の問題、進学など、大人に言えない相談にのっています。大学生自身も大人としての役割を初めて担い、子どもたちに期待されることで、居場所を見つけることにつながっています。理解してくれる大人と出会うことで、悩みを一人で抱え続ける子どもが少なくなると感じています。子ども食堂は、子どもに食事を提供する場所という考え方にとどまらず、様々な役割を果たすべきだと思います。

子ども食堂や児童館等で、人手不足の課題はよくあります。主宰者に話を聞くと、ボランティアに頼らざるを得ない現状があり、ボランティアに対する期待が高すぎると感じました。実際、子どもたちや保護者は、そこまで期待をしていないことが多く、期待値のギャップが問題です。子どもたちは、しっかりした大人と話すよりも、雑談をしに来ているというニーズがあり、それに応えられないと子どもたちも満足できません。結果的に、個人の課題や地域の課題が表に出てこないことがあります。

次に、食べることについて、代表の小林は、一緒に食べることをコミュニケーションのツールとしてとらえ、家族で食事を取ることが大切だと考えています。子ども食堂を立ち上げたのも、自身が家族で食事を取る機会があれば良かったという思いからです。

子ども食堂では、楽しく食事をする中で、子どもたちが自然と食器の片付けを手伝うなど社会的な役割を果たすようになります。そして、家でも手伝いをするようになります。保護者からも、「子どもが家族の仕事や家事を理解してくれるようになり、それによって子どもに優しくしてあげることができた」と聞いています。非常に嬉しいことです。

「京都 Tera.Coya」での学習支援については、成果が成績として表れることが多く、保護者から感謝

されます。公共の場で食事をすることや第3の場所があることは、子どもたちにとって非常に良いことです。

「京都 Tera.Coya」には「ご褒美制度」があり、勉強や手伝いをすると「テラコイン」という通貨をもらうことができ、コインは駄菓子と交換できます。私自身、はじめは「テラコイン」の導入に反対でしたが、きっかけとしては必要だと思うようになりました。低学年の子どもたちは、ご褒美欲しさに勉強や手伝いをしますが、中学3年生になると、勉強そのものに価値を見出すようになります。

今後は、子ども食堂以外にも現役世代の共同体が増えていくと思います。私は親戚のお兄ちゃんのように若い話し相手を探しに行く感覚で活動しており、プロフェッショナル化する必要はないと感じています。人手不足の問題については、プロフェッショナル化が進むと、運営側が期待しすぎて続かないことがあります。社会的に「すごい人」になると少しやりにくいように感じています。私は「この先、福祉や教育の世界に進むつもりはない」と伝えるようにしています。

最後に、多くの人は「子どもたちに希望を持ってほしい」「子どもには可能性がある」と言いますが、私は「可能性」ではなく「猶予」だと考え、「この期間までにこれをしてください」と、社会が期待することをわかりやすく伝えていきます。例えば将来、子どもたちは仲の良かった友達と恥ずかしくない姿で再会したいという思いがあります。友達と再会した時をイメージしてもらい、今自分に何ができるかを考えることが重要で、そのために勉強しておくべきだと伝えていきます。

共同体の話に戻りますが、目的を持っていなくても、食を通して人生が大きく変わることがあります。子ども食堂は、ごはんを食べる場所としても大事ですが、地域の人たちが集い、様々な役割を果たすコミュニティとして機能することが重要です。



子ども食堂と学校との連携について、私は連携には否定的です。その理由の一つはセキュリティの問題です。例えば、学校から勧められて子ども食堂に行く途中で事件や事故に巻き込まれた場合、誰が責任を取るのかという問題があります。2つ目は、子どもの権利に関する問題です。家庭や性の問題などの個人情報や、大人が勝手に学校と共有していいのかという疑問があります。この2点について、親や教育者、有識者の立場から意見をいただきたいと思います。

○ 七海 薫子 委員（市民公募委員）

子ども食堂が単なる支援の場ではなく、コミュニティとしての役割を果たしている点には私も同感です。私も子ども食堂で大学生と一緒に紙芝居をして、交流の場所としていました。「斜めの関係」について、親でも先生でもない大学生は、年が近いので子どもたちもなじみやすかったと思います。

学校との連携について、子どもたちが安心して話せる環境を守るためには、情報の取扱いに慎重さが求められます。知られたくない情報が学校に伝わっていると、子どもが気づいた時に傷ついてしまうかもしれないので、学校への報告は控えた方がよいと感じました。

また、勉強はいつでもできるものであり、自分のタイミングで進めることも大切だと思います。勉強しないと後で困るのは自分なので、余裕があってもいいと思いました。



○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）



私は学校運営協議会の理事として、年2回、学校や地域の方々と話し合いをしています。登校する子どもの様子などの話が出され、様々な角度から地域のみんなが子どもたちの様子を見ているのだなと感じます。

先日の会議で子ども食堂の話があり、「休日に子どもたちはお昼ごはんをどうしているのか」という質問がありましたが、現場でも見えづらい状況で、具体的な話は出ませんでした。公園で遊んでいる子どもに「お昼ごはんどうするの?」と聞くと、「お母さんから500円もらっている」と答えたそうです。貧困家庭ではないのですが、そういう状況があるのです。両親が仕事をしている中で、子どもたちに居場所があればという話も出ました。社会福祉協議会の

会長からも、居場所づくりを重点的にしているという意見があり、安心して話を聞いてくれる場が地域には必要だということが共有されました。

女性会としては、「京都市はぐくみプラン」にある地域の伝統行事や茶道体験などを各学区で取り組んでいます。私の学区では、小学3年生には風呂敷の結び方を教え、1年生にはPTAの方も一緒に、昔遊びを通して子どもたちとふれあいました。また、JAと協力して米づくりなども行い、様々なところで「京都市はぐくみプラン」の実践がされています。個人的には、去年から読み聞かせの会に参加し、子どもや先生、若いお母さんたちとのつながりができています。

ある時、低学年の子どもが知らない男性に声をかけられ、怖い思いをしたそうです。その時、読み聞かせのおばちゃんの家に参加を求めて無事だったという話を聞きました。そういうつながりが学校の中でできていることに安心しました。地域に安心できるつながりを持ち、積み上げていくことは大事だと感じました。

○ 小林 五月 委員（京都市小学校長会理事、京都市立広沢小学校長）

読書活動推進については、学校でも読書離れが懸念されており、学校では紙の活字を見て活動することに力を入れています。例えば、朝の読書時間をしっかり確保し、週2回、学校司書が図書の管理や朝の読み聞かせを行っています。学校図書館で借りたい本がなかった場合には次の週に借りられるよう予約制度も整え、多くの子どもたちは新しい本に興味を持ち、一生懸命読んでいます。しかし、家に帰るとメディアの影響で読書に親しみにくい状況もあるようです。学校や市内の



図書館を活用することで、本を買わなくても借りられる環境を充実させることができます。今後も学校の図書室の整備を進める必要があると感じています。

子ども食堂の話には共感するところが多くありました。子どもにとって安心できる場所を作ることが大事だと思います。学校には行きづらいけれど児童館には行ける中学生や、放課後まなび教室で安心を感じている子どももいます。子どもによって安心できる場所は異なるため、多様な場所を提供することが大切だと思います。

個人情報については、学校としては知りたい気持ちはありますが、子どもたちの権利を侵害しないように心がける必要があります。子どもたちが安心して話せる環境を守ることが重要です。

○ 森口 真希 委員（株式会社堀場製作所 理事 管理本部副本部長）

昔は近所のお兄さんやお姉さんに話ができるコミュニティがありました。今でもYMCA、日曜学校、スポーツ少年団など、子どもたちの居場所があります。まずはその枠組みから、誰かに頼ってみてはいかがでしょうか。そして、人権が守られることはとても大事なことです。

一方で、「京都市はぐくみプラン」も含めて、「子どもたちを守る」ところに焦点がありますが、課題や問題を作っているのは、大人自身の心の貧しさかと思います。大人の置かれた状況が子どもに連鎖していることが問題意識としてあります。虐待や家庭の問題の増加に対して、社会として手を差し伸べることが重要です。大協委員のご活動は、その連鎖を正回転させ、「信用できる大人がいる」「愛情を感じることができた」と感じさせる点で非常に意義があると感じました。

読書に関しては、例えば明治時代には「小説を読むことはけしからん」という風潮でした。時代とともに、メディアに対する価値観が変わります。子どもたちが、新しいメディアや動画、漫画をきっかけとして言語に興味を持つという視点もあっていいと思います。紙で字を読むことにこだわると、どうしても限定的になります。大人が本を読まない家庭では、子どもは本に親しみにくいので、オーディオブックなど様々な視点から、物語は楽しく、自分の人生を豊かにしてくれることを感じてもらえたらと思います。エンパシー（※）という言い方は少し難しいかもしれませんが、他人の気持ちや経験を自分のものにするという意味では、本以外のやり方も広げていく必要があると感じています。

（※）エンパシーとは、他人の立場に立ち、相手の感情や状況を理解し、共感する力のことだよ。



○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学大学院農学研究科助教）



「京都市はぐくみプラン」について、子どものいる家庭だけに関心を向けがちですが、そうでない家庭へも、疎外感を持たれずに「みんなで」進めてゆく、という形につながるよう、いろいろな立場の人たちに知ってもらって関わってもらう工夫ができればと思いました。

「京都市はぐくみプラン」の“ライフステージに応じた施策”がとても大事です。私自身の経験を思い返しても、子どもが生まれたての時期は、どの施設でおむつを替えられるかといったことが問題でしたが、小学校に上がると学童に意識が向いてゆくというように、必要となることや関心はどんどん変わっていききました。ライフステージごとに目を向けた様々な施策はありがたいと思います。

読書に関しては、うちの小学生の子はオーディオブックが好きです。コロナ禍にハリーポッターシリーズのオーディオブックに出会ってから、繰り返しずっと聴き続けていまして、もう何百時間にもなります。大人はどうしても読書は「目から」と思いがちですが、「耳から」という入り方もありますので、意識してゆけたらと思います。

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

読書の活動推進については、「読書」だけではなく、AIやインターネット、オーディオなども含めて

「情報の取り入れ方と読書」ととらえ、情報をどう取り入れて活用するのか、枠を広げた話し合いにしていきたいと思います。

子ども食堂の運営については、ボランティアに頼りすぎると継続しないという問題があります。安心して子どもたちが行ける場所は、継続していないと成り立ちません。子ども食堂は、第3のコミュニティとして必要な場所だと思いますので、バックがしっかりしていることが必要です。

子ども食堂の運営は、NPO や団体、自治体等どのようにされているのでしょうか。子ども食堂に協力したい人も、子ども食堂の受け皿について知らない、どこに聞いていいのかわからないと思っています。

「京都 Tera.Coya」で「テラコイン」が勉強や手伝いのきっかけになっていることは事実だと思います。それを良い形に昇華させるやり方を考えることが必要だと思います。人の欲求や動機付けは、簡単なものから生まれやすいので、それをうまく正しい方に導くのが大人の役目かと感じました。



○ 大脇 晋太郎 委員（市民公募委員）

子ども食堂の運営母体は、半官半民、民意団体、サークル等と様々です。子ども食堂の運営に関して、許認可は必要ありません。活動に必要な費用の調達方法も、京都府や京都市の補助金や助成金、寄付、企業のスポンサーなど様々です。公共機関や社会福祉協議会から助成金をもらって運営するのが主流だと思います。

一般的には、社会福祉協議会が子ども食堂のとりまとめをしており、開催情報や人員募集情報等が得られます。組織として継続して発展するために、母体をしっかりと持つ必要があるという考え方もあります。「京都 Tera.Coya」の場合は、大学生サークルが主体であるため、年度が変わるごとに新しい学生が来てくれて、事業が継続できています。また、「京都 Tera.Coya」は口コミで子どもたちに広がっています。外部から見ると不安定な組織運営ではありますが、継続してできるような仕組みが作られています。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

対価を求めるということは、その是非を問われます。「スタンプラリー」は活動の動機付けとして、今も様々な活動に使われています。必ずしも一定の価値と交換されなくても、収集意識というところから一つの動機付けとなると感じました。

○ 桙木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

以前、大阪や東京の女子少年院に慰問に行ったことがあります。そこで授業をしましたが、なぜ少年院にいるのかと思うほど、生き生きとした可愛い子どもたちでした。必ずしも虐待などを受けた貧困家庭の子どもではなく、裕福な家庭で育った子もいるようでした。少年院の職員の方は、「子どもたちの帰る場所がない」、「更生しても、元の環境に戻ると、また少年院に戻ってきてしまうことが残念」とおっしゃっていました。子ども食堂が、そのような子どもたちの居場所になればいいと思いました。



読書に関しては、アニメや漫画ではダメなのでしょうか。漫画をきっかけに小説を読むこともあります。もちろん活字を読むことは、言葉が豊かになり、想像力が増して良いことですが、気長に見ても良いように思いました。

○ 松田 規久子 委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）



家族が飲食店をしており、余った材料等で地域の下宿生限定で、週末に「100円食堂」をしています。X（旧ツイッター）や張り紙で告知し、美味しいごはんを食べて、お皿洗いだけして帰ってください、という形です。毎回10人程、留学生や大学1年生等、他にコミュニティがない方が多く来られます。やはり「食」は、地域でコミュニティを作る、支援が必要な方に手を差し伸べたいという時に、強力なツールになると思いました。

学校と子ども食堂の連携については、日頃から情報共有するよりは、独立した形で、本当に必要なときに情報提供する形でいいのではないかと思います。

「京都市はぐくみプラン」本体について、子どもたちのためのプランであることを考慮し、例えば、子どもたちが緊急時にどこに行けばいいのかがすぐにわかるような、動画やアニメを作成するのが良いのではないのでしょうか。そして、ネットや動画、音声配信等と一緒に紙を配布する等、メディアミックスを活用して、子どもたちがSOSを発したいときにすぐに発信できる体制を整えることが重要だと思いました。

同様に、「子どもの読書活動推進のための取組指針」についても、様々なメディアをミックスし、子どもたちが活字に囲まれるような指針になると良いと思います。小学校高学年以上の子どもについては、自分たちで良いと思う本や情報を発信し、友達と共有し、下の子どもたちに「この本がいいよ」と紹介できるような場を作る取組があれば良いと思いました。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

「京都市はぐくみプラン」の意見募集について、小学生からの回答が一番多く、その意見がプランに反映されたことは素晴らしい成果だと思います。

「京都市はぐくみプラン やさしい版」には、全てにルビが振ってありますが、「要予約」などの表現は小学生には馴染みがないかもしれません。目的とする年齢層に応じた手段を考える必要があると思います。例えば、これを高校生に作らせてみてはいかがでしょうか。取組をきっかけに新しいコミュニティを作ることができるかもしれません。

また、子育てに直接関わっていない世代に意識を持ってもらうことが大事です。大学生のボランティアや、老齢の家族に協力していただくことは非常に意味があると思います。そのための工夫が今後必要だと感じました。



○ 稲垣 恭子 委員（京都大学理事・副学長）

「斜めの関係」には以前から興味がありました。縦の関係は価値がはっきり伝わる一方で縛られることがあり、横の関係は仲良くなる反面、ライバル関係にもなりやすいです。「斜めの関係」はこれらのマイナス面を緩和し、価値を転換する意味で社会的に必要とされていますが、最近では減少しています。大

脇委員が「斜めの関係」を強く意識されているのは、実際に経験されているからだと思います。「斜めの関係」は、縦とも横とも異なる価値観を受容できる点に大きな意味があり、秘密や内的な世界を保持できる空間でもあります。そのような空間はあまりないため、子ども食堂について、よく考えて取り組まれていると感じました。



居場所が多様であることは、様々な価値の転換を受容する場所があるということです。様々なスタイルがあって良いと思いますが、学校と安直に連携するという話ではないと思います。むしろ「学校はどのような子どもを育てたいのか」を明確にする必要があるのではないのでしょうか。それがあからこそ、異なる価値を支える部分が生まれます。

読書に関しては、オーディオや映像等を含めた様々な形で読書空間が広がることは重要だと思います。あわせて、京都市でもビブリオバトルの取組がありますが、他者に対してどのように説得し、表現していくかが大切です。ただ自分の気持ちを伝えるだけでなく、どのように論理的に伝えるのか、ロジックと感受性をどのようにつないでコミュニケーションするのも大切です。

研究者も参画し、どのような子どもを育てたいのかをしっかりと考える必要があると感じました。

○ 戌亥 慎吾 委員（令和6年度京都市PTA連絡協議会会長）

読書については、情報収集の手段として本を読んでいたのですが、現在では動画等様々な方法があります。読むよりも、動画等の方が情報量が多いです。子どもたちも時間がない中で効率を重視するようになり、タイパ（タイムパフォーマンス）やコスト意識が高まっている時代です。そのため、情報量を考えると動画等の方が合理的だと考えるようになってきていると思います。

しかし、本を読むことの良さは、情報を自分で収集し、わからないことを調べる過程にあります。そうすることで多くの学びや気づきを得ることができます。また、読書を勉強や情報収集の手段としてだけでなく、楽しみや娯楽として提供することが大切です。本の良さ、例えば紙の匂いやインクの香りなど、本そのものの魅力も伝えることができれば素敵です。

また、私自身も子ども食堂を運営しています。子ども食堂は、人のつながりを作る場所であり、運営する人たちも、来ている人たちも楽しんでくればそれで良く、結果的に子どもの支援につながるのではないかと考えています。子ども食堂という言葉を広め、「私もやってみたい」と思ってもらえれば、それだけでも価値があると思います。

「斜めの関係」について、親は子どもを褒めたり叱ったり、評価や判断をします。学校の先生も同様です。しかし、縦の関係だけでは納得感が得られなかったり、勇気をくじかれたり、支援が不足することがあります。親や先生とも、横の関係のように、子どもたちを勇気づけ、「ありがとう」と言えるような、両方の立場を取れたらいいと思います。様々な価値観を受容しながら、自分たちも様々な目線に合わせられるような関係が大事だと感じています。

様々な取組がありますが、一つ作ったら終わりではなく、様々な事例について話し合うことで、議論が深まると思います。



○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー副理事長、山ばな平八茶屋主人）



地域のつながりが希薄になってきている中で、子ども食堂は非常に良い取組だと思います。私自身も、子ども食堂と貧困が結びついていると考えていましたが、今はその考えが変わってきていることを初めて知りました。

子ども食堂は、助成金が続くかどうか一つの生命線になるのですね。責任問題は難しい問題です。あくまでも自己責任で皆さんが運営しているので、ルールがきちんとできていればそれで良いと思います。

責任問題や個人情報取り扱いについて、大事なのは信頼関係だと思います。人と人との信頼関係が根本にあることが重要です。人は人によって支えられているので、いたわりや思いやりが互いにあることが大切です。その結果として、悩みを打ち明けたり、日々の思いを共有したりすることができます。

情報共有をする際には、信頼関係が築けている人に対して行うことが重要です。学校でも同様に、情報共有をしないことも大事ですが、危険性がある場合はしっかりと情報共有する必要があります。

「京都市はぐくみプラン」について、この内容を実現するためには、子ども食堂や地域のコミュニティなどの場が必要です。そして人間関係がしっかりと結べていることが大事です。

○ ウスビ・サコ 委員（京都精華大学前学長、人間環境デザインプログラム教授）



日本では、家と学校の関係が微妙になっていると感じます。家が学校の延長になってしまい、学校でのプレッシャーが家に帰っても続くことがあります。「宿題しなさい、〇〇しなさい」と言われ、子どもが自由に考える時間がありません。オンとオフの切替が難しく、サードプレイスを見つけにくい状況です。多くの大人が同じような関わり方をしてしまうため、子どもの話を聞いてあげる目線や、学校とは違う話題を提供する場所が少ないと感じます。私の国（マリ）では住宅に中庭があり、子どもが帰ってくると、いろいろな大人が様々な話をしてくれます。そうすると、子どもも楽にいろいろな話をするすることができます。

しかし、日本ではそのような場所が少ないため、子ども食堂がサードプレイスとして重要だと思います。子ども食堂は、子どもにとって、自由でプレッシャーがなく、仲間もでき、大人とも仲間になれる場所です。日本では、子ども食堂のイメージがまだ定着しておらず、周りの親から否定的な意見が出ることもあります。これから子どもが少なくなる時代には、コミュニティや地域で子どもと関わるのが重要です。それぞれの役割があり、そういった場を設ける方々がいることで、様々な形で教育に参画できると思います。今後も子ども食堂の需要はあると感じています。

■ 報告ー1 京(みやこ)まなびいニュースレターについて

ボランティアをテーマに、市民の皆さまの力を地域や社会に生かしていただく活動の情報を掲載しています。また、「京まなびミーティング」をアスニー特別講演会として、5月9日に本郷議長、16日に榎木委員による講演を予定しています。

■ 報告－2 「新京都戦略（骨子）」パブリック・コメント結果について

前回会議において「新京都戦略（骨子）」についていただいたご意見をパブリック・コメントとしてあげました。その結果が報道発表され、ご意見への本市の見解が出ており、抜粋しています。本戦略は2月市会での議論ののち、3月中に策定・報道発表されます。



完成した「新京都戦略」
は[こちら](#)。



■ 報告－3 令和7年度京都市教育委員会予算案について

京都市の令和7年度の教育予算案は、前年度比41億円減の1,126億500万円で、生涯学習の推進には約23億円が計上されています。来年度は、学力向上対策や伝統文化体験などの取組を継続しつつ、演劇的手法を活用したコミュニケーション力の育成、STEAM教育の充実などの新規事業にも取り組みます。また、教職員のウェルビーイング向上や部活動の地域展開、学校体育館の空調整備などの課題にも対応します。生涯学習については、地域資源を活用したつながり支え合いの創出事業の一環として地域学校協働活動支援員の配置、新しい図書館構想プロジェクトの設置などを検討し、市民の生涯学習環境の充実に努めます。

■ 報告－4 令和7年度「学校教育の重点」について

学校教育を進めるにあたり、全教職員、教育委員会、地域、保護者と指針や重点取組を共有することが重要であり、毎年度策定しています。京都市が目指す子ども像として「伝統と文化を受け継ぎ、次代と自らの未来を創造する子ども」が示され、その具体的な3つの姿が記載されています。

今年度の主な変更点は2点あります。1点目は、子どもだけでなく教職員についても一人一人を徹底的に大切にするという趣旨を追加しました。2点目は、伝統文化・芸術等を通じて豊かな感性・情操を育む教育の充実に関する記載を充実させました。

■ 主催事業 及び 刊行物の案内

6月の第4回会議で「京都市生涯学習総合センターと京都市図書館の取組について」を取り上げました。アスニーでWi-Fi導入について、全研修室への設置を完了しました。また、オンラインセミナーを5月から毎月1回開催予定です。

■ 教育長 挨拶

■ 閉 会



※ この摘録の作成には補助的に生成AIを利用しています。